善導の観仏三昧と念仏三昧について

小林尚英

ここでの問題点はまず善導の『観経疏』で説く念仏三昧為宗・観仏三昧為宗と、『観念法門』で説く観仏三昧と念仏三昧とは、相一致しない所があるとして古来から論議されていることである。それを具体的にいうと、『観念法門』の般舟三昧経によつて詳しく論じられている念仏三昧は、称名念仏を本質とする『観経疏』のものとは遙かに隔たりがあるとしている。[1] その説明によると『観念法門』でいう念仏三昧は定意であり、正行定心念仏であり、般舟三昧である。その般舟三昧とは十方現在仏悉在立定、又は一切仏現前三昧と訳される語であつて、『般舟讃』でも説くようにそれは七日乃至九十日間常に行道して、現前に諸仏が前立するのを観ずる定心の三昧が般舟三昧であるとされている。そうすると『観経疏』で述べている念仏三昧とはその名を等しくしながら、その内容は全く異なるものであり、それはむしろ観仏三昧と類を同じくする正行定心念仏であるとさえしているのである。このように念仏三昧の解釈に食違が見られるが、果して『観念法門』と『観経疏』の念仏三昧の解釈について、本質的に隔たりがあるのであろうか。まずそこに中心点を置いて論じてみたいと思う。

まずその念仏三昧であるが『観経疏』に、「今比ノ観経ハ即以ニ観仏三昧ヲ一為レ宗ト亦以ニ念仏三昧ヲ一為レ宗ト」とあるが、これについて良忠の説明によると、[2]『安楽集』で観仏三昧とあるのは観仏と称名を共に含んだものであり、念仏三昧とあるのは同様に又観仏と称名を共に含んだものである。それに対して善導の『観経疏』では観仏のみに限つて観仏三昧、称名のみに限つて念仏三昧とされたのであり、本質的には道綽・善導の解釈は同一であると述べている。ここを基準にして考えていくと、『観念法門』の念仏三昧の説明であるが、[3] その文中には称名と観仏の要素が含まれていると思われる。その文の「当ニ念ス我名ヲ」は、法然も『選択集』十六章段の八種選択で挙げているように称名を意味し、また「故由レ念ニ仏色身ヲ一故得ニ是ノ三昧ヲ」は観仏を意味すると思われる。以上により、

この『観念法門』の念仏三昧の説明では、称名と観仏の二つの要素が含まれていると思われる。そこで『観経疏』及び『観念法門』における観仏三昧と念仏三昧の解釈を表にすると次のようになる。

◎『観念法門』（『安楽集』も同じ立場）

（観仏三昧…『観経』・『観仏三昧海経』――観仏・称名
（念仏三昧…『般舟三昧経』――称仏・観仏

◎『観経疏』（二重構造性）

観経　観仏三昧為宗―観仏
（念仏三昧為宗―称名＞正助二業の差別の為に別立する（廃観立称への姿勢）
（観仏三昧―観仏・称名（例第九真身観の中に称名の念仏が説かれている）
（念仏三昧―称名・観仏

これによつて分ることは、まず『観念法門』の観仏三昧は「依二観経一明二観仏三昧法一」とあつて、これは正しく『安楽集』の「今比観経以二観仏三昧一為レ宗」と同じ意味であり、『観経疏』のように観経を観仏三昧為宗・念仏三昧為宗とは述べていないのである。そうするとこの『観念法門』の観仏三昧には観仏と称名の要素が含まれてくると思われる。又『観念法門』の念仏三昧にも、前述の如く、観仏と称名の要素が含まれてくるのである。

次に『観経疏』であるが、これは前述の如く、観経を観仏である観仏三昧為宗と口称である念仏三昧為宗とに別けているのである。そこで一つの疑問であるが、何故善導は観経を観仏三昧為宗・念仏三昧為宗としたかである。それについてまた良忠の説明によると、[4]

「凡諸経論中念仏者皆通二観称一智度論等其義炳然然今家別二立両三昧名一者為レ令レ差別助正二業一限二口称一号二念仏三昧一限二相好観一名為二観仏一此乃念仏三昧正業観仏三昧助業故也」

とあり、ここでの説明は助正二業の差別のために観仏三昧為宗・念仏三昧為宗としたとしている。要するに本願の称名念仏を強調せんが為に「今比観経即以二観仏三昧一為レ宗亦以二念仏三昧一為レ宗」と述べたものであろう。また『観経疏』の中、観仏三昧であるが、これも称名の要素があつて例えば、観仏三昧の中心である第九真身観の中で称名が説かれていることである。それは、[5]

「自余衆行雖レ名二是善一若比二念仏一者全非二比校一是故諸経中処処広讃二念仏功能一如二無量寿経四十八願中一唯明下専念二弥陀名号一得レ生又如二弥陀経中一一日七日専念二弥陀名号一得レ生又十方恒沙諸仏証二誠実一不虚一也又此経定散文中唯標下専念二名号一得レ生此例非レ一也広顕二念仏三昧一竟」

とあり、これは観仏三昧を説く中に称名の念仏が述べられているのである。『往生礼讃』の無観称名[6]の説明で知られるように、称名によつて見仏することができるとすれば、この第九真身観の中に称名が説かれてきても決して不自然なものでは

はなく、却つて称名が説かれたことは見仏への易行性、あるいは手立を暗示しているとも思われる。以上のことから、『観経疏』においては観仏三昧と念仏三昧の解釈は、二重構造性をもつたものとして捉えなくてはならぬと思われる。その立場でないと、恐らく『観念法門』と『観経疏』との矛盾は解決ができないと思われる。

そこで最後に『観経疏』の観仏三昧為宗と念仏三昧為宗であるが、念仏三昧為宗を別立した意図を別の角度から探つてみたいと思う。まず観仏三昧為宗とする性格は、観仏であり、十三観であり、定善であり、思惟正受であり、韋提致請であり、上機であるという性質のものである。これに対して念仏三昧為宗とする性格は、口称であり、十六観中の後の三観であり、散善であり、三福九品であり、釈尊自開であり、散機であるという性質のものである。これに対して、浄影等の諸師が観仏三昧とする性格は、観経の十六観であり、定善であり、正受であるという性質のものである。この浄影等の説に比べると、善導とは根本的にその相違が分るのである。要するに善導が念仏三昧為宗として別立したのは、第一には浄影等の諸師に対抗せんが為であり、第二は『往生礼讃』の文珠般若経による無観称名説である。それは称名の行を修することによつて、やがて総想帰依の念がおこり、まさにそれは観察行に等しくなるとするものである。それ故に、散機の凡夫にとつては、観を廃して称名をとるのは当然のことになるのである。しかもその称名は本願であるから、観仏三昧為宗の外に口称である念仏三昧為宗が別立されてくるのは当然であり、さらには廃観立称への姿勢まで示してくるのである。以上の二つの理由によつて念仏三昧為宗が別立されたものと思われる。

以上、観仏三昧と念仏三昧を中心にして述べてきたが、『観念法門』ではただ「依テ観経ニ明ス観仏三昧法ノ」としか述べていないが、『観経疏』にいたつて観経を観仏三昧為宗・念仏三昧為宗とされてきたのは、善導の思想的発展を物語つたものと思われる。それは取りも直さず、『観念法門』が先で『観経疏』が後で撰述されたともいえよう。この点に関して藤原幸章氏によると、(7)『安楽集』の内容と『観念法門』の内容とを詳細に比較検討されており、その結果、『安楽集』の影響を直接的に受けたのは、この『観念法門』であるといつているのである。この説に従えば、善導の五部九巻の中で一番早く成立したのは『観念法門』ということになる。

1　普賢大円「善導教義に於ける観の研究」(『真宗学』17・18号)
2　浄全二の一五五頁　3　浄全四の二二四頁　4　浄全二の一五五頁　5　浄全二の四九頁　6　浄全四の三五六頁　7　藤原幸章『観念法門について――その組織と性格――』(『大谷学報』37―3号)